
子供の虚勢

鷹槻れん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

子供の虚勢

【Nコード】

N7960C

【作者名】

鷹槻れん

【あらすじ】

忠成の家の猫が死んだ。大切にしていた猫なのに、泣かない忠成。秋連にはそれが凄く心配で……。【幼なじみシリーズ】 関連作品；「嗅覚の法則」、「From・A」

序（前書き）

【子供の虚勢】をお読みになれる前に

BL要素を含んでいます。

苦手な方はご注意ください（´・ω・｀;）。

BLって何？って思われた方は読まれないほうが無難かと（^^; ;

幼なじみシリーズ

関連作品「嗅覚の法則」「From・A」

序

燦々と降り注ぐ柔らかな日差しの下、猫と老婆と園児が二人、心地良さそうに日光浴を楽しんでいる――。

「ばあちゃん、ばあちゃん」

そう言うっては嬉しそうに老婦の顔を見上げながら、他愛のない質問を矢継ぎ早に投げ掛ける男の子。

「アレはなに？ こっちは？」

庭に咲き乱れる花を指差す小さな手に、優しい声が応じる。

「あれは木蓮、こっちは椿」

どの花を指差しても、まるで魔法のように答えてくれる皺まみれの顔を、男の子は尊敬の眼差しで見つめる。

「ばあちゃんはずいいや！ なんでも知つとるんじゃない！」

孫が生き生きとした声でそう言うのと、老女は目を細めて嬉しそうにはにかむ。

「伊達に年は取つとらんよ」

ひざ上に載せた白黒模様の猫を優しく撫でながらそう言う。

「アキチュラもすごいけどばあちゃんには負けるね」

本当はアキツラ、と言うべきところなのだが、彼が言うとき呂律が回らずいつもアキチュラになってしまふ。幼児らしいたどたどしい口調でそう告げた男の子を、もう一方の少年がムツとした顔で睨み付けた。

「俺、ばあちゃんには負けるけど、忠成^{ただなり}には勝ってる」

老婆は負けん気の強そうなその子を、にっこり笑って見つめると、「アキくんは賢いもんね。だから、っていうのも変だけど……たーくんのこと、末永くお願いね。たーくんはチュウのことしっかり面倒見てやってちょうだいねえ」

刹那寂しげな笑みを浮かべてそう言った。

その言葉に、突き放されたように感じた幼子たちが息を飲んで彼

女を見遣った。その視線の先で、老婆はいつものように何事も無げな、のほほんとした顔で庭を見つめていた。

あれは何年前の光景だったろう。

向かい家の庭^やから迫り出した椿が、路上へポタリと花を落とした気配に、ふと立ち止まって思考をめぐらせる。

ニヤーン。

いつの間にやってきたのか、足元にまわりついてきた牛柄の猫を片手で抱き上げると、

「チュウ、お前、また痩せたんじゃないか？」

もう一方の手に学生靴を持ったまま問いかける。

その声に、齡十九歳を越えた老猫が目を細めて喉を鳴らした。体重もさることながら、昔は黒い斑模様の中に、こんなに白い毛は混じっていなかったように思う。

「お前も年取ったな……」

何気なくそう言ってから、ちよっぴり悲しい気持ちになる。

「婆ちゃんが死んで何年だったけ」

あのときの忠成は見えていらなかった。

俺だつて悲しくて堪らなかったのだ。おばあちゃんっ子だった忠成を思うと、今でも胸が張り裂けそうになる。

婆ちゃん——正確に言えば忠成の祖母——は彼の幼馴染である俺にも本当の婆ちゃん以上に大切な存在だった。

俺の本当の祖父母は、父方、母方ともに早くに亡くなっていて記憶にない。だから俺にとって実質的な祖母は忠成の婆ちゃんだと考えた方がしっくりくるのだ。

それは、婆ちゃんがよその子・うちの子という風に、わけ隔てることなく俺たちに接してくれたからだろう。

いつだったか婆ちゃんが、俺が居ないと思って忠成にこう言っているのを聞いたことがある。

『たーくん、アキくんを大切にせんにゃーいけんよ？ アキくん、

無口で取っ付きにくいトコもあるけど、たーくんの生まれて初めてのお友達じゃけえね』

それをたまたま小耳に挟んだとき、俺は鼻の奥がじいーんと熱くなるのを感じた。

忠成にとって俺が初めての友達であるように、俺にとっても忠成は一番最初に出来た友人だ。

だから、俺も忠成を大切にしなくちゃ。そう思ったのを今でもあの熱とともに鮮やかに思い出す。

あれから数ヶ月。

向かい家の、吉本家の庭で咲き誇っていた遅咲きの椿も、その枝先に実を結び始めていた。

それに代わって、今度は合ねむ歡の木が、薄紅色の花火みたいにふんわりとした花を咲かせて庭を彩っている。

ちょうどその頃、婆ちゃんの忘れ形見だった猫チュウが死んだ。

目を射るような日差しと、道路に転がったセミの亡骸がやけに脳裏にこびりつく日だった。

今を盛りと綿毛風の花をつけた合歡の木の、その根元にひっそりと隠れるようにして息絶えていたチュウ。

老齡のチュウに、今年の猛暑は耐えられなかったのだろう。

忠成が婆ちゃんの死後、心の拠り所にして可愛がっていた猫だ。

そいつが死んだのに、幼馴染みは涙ひとつこぼさなかった。

それが、俺には物凄く気懸かりだった――。

序（後書き）

友人と一緒に創作中心サイト「空と夜」運営中。

もしよかったらそちらもチェックしてみてください

<http://soyo.silk.to/s-y/>

上記サイト内、リレー形式でR18指定のBL小説連載中です

ねっとりとした大気が身体にまとわりつく。

チュウが旅立ってから二週間余りが経過していた。盆も過ぎたのに、暑さは一向に弱まる気配がない。

こんな夜は扇風機を回したところで焼け石に水だ。ましてや、窓を開けたぐらいで心地よい風なんて期待できるはずもなく。

扇風機を回すことを早々に諦めると、俺はクーラーのリモコンを手にとった。

「暑……」

言いながら、スイッチを入れる。

風呂に入る前にそうしておかなかったことが悔やまれたけれど、今更どうしようもない。

団扇を片手にくつろげた胸元を扇ぎながら、ふと隣家の幼馴染みのことに思いを馳せる。

（今日も来るんだろうか……）

幼馴染み——忠成——の家にはエアコンがない。

それで、今日のような熱帯夜には当然の顔をして涼みになるのが常になっていた。

忠成には何ら他意がないであろうその行動が、俺にとっては無茶苦茶苦痛だなんて思いもよらないはずだ。

「はあ……」

気が付くと団扇を動かす手が止まっていた。

エアコンから吹き付けてくる風が心地よい。

そんなに広い部屋じゃないので、考え事をしている間に冷えたらしい。

勉強なんて別にやらなくても出来るけれど、所在無さにとりあえず学習机に向かってみた。

夏休みに入って二日目で、課題の大半は終えている。

頭の体操にもならないような簡単な問題の羅列に飽きてしまったからは、ほんの数頁を残して放り出していた。

（それでもアイツにとっちゃ難問だらけなんだろうなあ）

眉間に皺を寄せて真剣に問題に取り組む幼馴染みの姿を思い浮かべ、自然口許がほころぶ。

（本当、アイツは何をやっても可愛い）

無意識にそう思ってから、俺は頭を振ってその考えを追い払った。（男相手に有り得ねえだろ！）

普通、異性に対して抱くであろう感情を、最近何故か忠成に対して感じてしまう自分に俺は戸惑いを覚えていた。

中学に入ってから、俺はぐんぐん背が伸びた。

それまでは大差なかった忠成との身長差が、ここ一年で十五センチ以上開いてしまった。

それで、今までは対等に正面から俺を見ていた忠成の視線が、自然上を仰ぎ見るような格好になったのだ。

俺ばかり背が伸びることを不満に思っているらしく、時折挑むような目つきで俺を睨みつけてくる忠成。

その表情が、図らずも俺の庇護欲をくすぐり、困っている。

忠成に上目遣いで見上げられるたびに、俺は自分の心臓がどうにかなってしまいそうで焦った。

最初は何でそうなるのか理解出来なかったけれど、俺は馬鹿じゃない。すぐに、その感情が恋心だと気が付いた。

正直、自分で自分が信じられなかった。

何で俺が、同性の——しかも幼馴染み——相手にそんな気持ちになるんだ！

言っとくが、俺はノーマルだ。

断じて同性愛者じゃねえ。

現に初恋は、小学一年のころ担任だった若い女教師だったし。

聡明な彼女の雰囲気を出すと、今でも綺麗だったなあ、と思える。

他の大人たちみたいに俺をやたらと子供扱いしないところが特に好きだった。

だから、だ。

まさか同性相手にこんな気持ちになるだなんて、我がことながら青天の霹靂^{へきれき}で。

本音を言々と自分の気持ちが整理しきれていないというのが正しい。この気持ちが気の迷いならそれでいい。早いところ正氣に戻ってくれと願うだけだ。

そんなわけで、俺は自分を落ち着かせるため、なるべくなら忠成と距離を置きたいと思っていた。

夏休みに入ればしめたものの、のはずだった。

中学に入ってからテニス部に入部した忠成は、日中部活に追われて過ぐす。

その間、無所属同然の生活をしている——実際には文芸部に形だけ籍がある——俺はフリーだ。のんびりとテレビを見たり読書をしたりして過ごせる。最近は夜眠れないせいもあって、昼寝をすることが多くなっただけで、概ね落ち着いて過ごせている。

向かい家に住んでいるため、中学に入るまでの俺たちは本当にいつも一緒だった。

学校への登下校はもちろん、帰ってからもどちらかの家に入り浸る生活が当たり前になっていたのだ。

一人っ子の俺にしてみれば赤ん坊のころからずっと一緒の忠成は隣に居て当然の存在だ。

彼に妹が出来る七歳まで、二人の間に割って入る者が出てくるなんて思いもよらなかった。

七つも歳の離れた俺たちを、「お兄ちゃん、お兄ちゃん」と呼びながら付き歩く幼子が、決して憎かったわけではない。

でも、鬱陶しい存在だと感じてしまったのもまた事実だった。思えば、あれにしたって嫉妬だったんだろう。

いくら仲が良いとは言え、俺と忠成は他人だ。

血の繋がった妹には勝てっこない。

そんな俺の、つんけんした空気を感じ取ってか、少し大きくなつてからの彼女は俺たちに付きまとわなくなった。

「最近 結衣ゆいがお前を意識してる気がする」

一人何にも分かっていない鈍感な忠成が、ふと漏らした一言に俺は愕然としたものだ。

忠成は結衣ちゃんが俺に懸想しているのでは？と思ったらしい。でも実際は違うはずだ。

恐らくは俺が発する「邪魔だ」というオーラが伝わっていただけなんだ。

考えてみれば俺も大人気ない。

小さいころから子ども扱いされることに物凄い嫌悪感を覚えていたはずなのに、実際の俺なんてその程度の小さな男だったんだ。

そう気付いてからは、極力彼女に優しくするよう心がけた。

それが、忠成の目にどう映ったのかなんてややこしくなりそうなので考えないようにした。

「秋連つてさ、本当整った顔してるよな。無茶苦茶うらやましいぜ」何の前触れもなく俺の顔をまじまじと見つめながら告げられた忠成の言葉に、俺は酷くドキッとさせられたことがある。

中学に上がって間もないころの話だ。

「女子たちが騒いでるの、聞いたんだ。天一神君はハンサムだ、って」

そのときは、後から告げられた一言に反応したのかと思ったけれど、今思えばきつと忠成が俺の顔を形容した「整った顔してるよな」というくだりにグツときたんだ。

それは、忠成自身が俺に対して抱いているイメージに他ないから。結局女子が騒さわごうが騒さわぐまいが、関係なかったのだ。俺は忠成にどう思われているか、が気になっていた。

そんな風にとりともえないことを考えていると、この恋愛感情は揺らぎないものなんじゃないかと思えてくるからまずい。

「ヤバ……」

気持ちを落ち着かせようと机に向かったはずなのに、これじゃ逆だ。

ふと壁の時計に目をやると、二十一時を回ったところだった。

大抵このぐらいの時間に、忠成はやってくる。

今、忠成に入ってかられたら本気で困る。

俺はどんな顔をして友の顔を見れば良いのだろう。

「はあ……」

この部屋に入ってから二度目の溜め息をついたと同時に、階下から階段を駆け上がってくる足音が聞こえてきた。

「マジで勘弁してくれよ」

頭が痛い。

この軽快なステップが、忠成以外のものであるはずがない。

1（後書き）

友人と一緒に創作中心サイト「空と夜」運営中。

もしよかったらそちらもチェックしてみてください

<http://soyo.silk.to/s-y/>

上記サイト内、リレー形式でR18指定のBL小説連載中です

「よおっ」

心の準備も済まないうちに、扉が開かれる。

無論、ノックなんてするような殊勝なたまではない。

声と同時に何の前触れもなく開かれたドアに、俺は背を向けたまま深呼吸をした。

俺の様子なんてお構いなしに部屋へと踏み込んで来た忠成を、精一杯の仏頂面で振り返る。

「あゝ。やっぱここサイコー」 すっげえ涼しいー」

途端、マイ枕片手に、うつとりと目を細める忠成の笑顔が目に入っ
て、俺は軽い眩暈を覚えた。

（ヤベツ。今の顔むっちゃ可愛い……）

そう思ったのを隠そうとしたら、声が自然と不機嫌になった。

「今夜もかよ……」

本当は毎夜のように忠成が訪ねて来ることが、嬉しかったりする。別の部分では困っている自分もいるけれど、基本俺はこいつの顔を見るのが好きなのだ。

「だって俺ん家、クーラーねえんだもん」

言葉とは裏腹に、全く悪びれた様子もなく歩み寄ると、我が物顔でベッドに腰掛ける忠成。

忠成は、俺の家を訪れる際、必ず枕を持ってくる。この枕、頭の下に敷くために持っているわけではないことに、ここ数日で気が付いた。そのことが、俺の胸を締め付ける。

「俺の部屋は避暑地じゃないぞ……」

言葉と表情は思いつきりぶつきら棒になっているけれど、そんな忠成を追い返す気なんてさらさらない。

元気に振舞っているけれど、俺には忠成のSOSが感じ取れる。そんなことには気付かない振りをして彼とは距離を置けと警告を

発する自分と、そんなん出来っこないだろ、と否定する気持ちとが葛藤する。で、結局は後者が勝るのだ。

我ながら甘いな、と思ったら溜め息が出た。

「そんなに迷惑？」

その溜め息に不安を感じたんだろう。

頼りない表情を浮かべた忠成が、ベッドに座ったまま俺のほうを見つめてきた。

俺も椅子に腰掛けているから思いつきり上目遣いをされたわけじゃないけれど、やっぱりこの目にはやられる。

途端、心臓がドクンツと跳ね上がったのが分かった。

「……いや、迷惑じゃねえけど」

思わず視線を逸らしてそう告げると

「じゃあベッドが狭くなるから？」

常々「シングルベッドに二人はきつい」と俺がこぼしているのを覚えていたんだろう。

申し訳なさを含ませた小声で忠成が言う。

「俺、下で寝てもいいよ？」

続けて床で寝ると言い出した忠成に、俺はちよつと焦った。

華奢な忠成に、そんなことはさせられない。

実際は子犬のように元気一杯の男なんだけど。

頭では分かっているけど、彼の細い首筋や、四肢を見ているとどうしても守らなくては、と思ってしまうのだ。

「却下だ。んな必要はねえ……」

ああ、分かってる。完全に俺の負けだ。

忠成に気付かれないように心の中で舌打ちすると、俺は勉強机に向き直った。

「まだ寝ないの？」

二十一時過ぎから寝ようとしていることのほうが、俺には驚きだ。その面差しや立ち居振る舞いにまだまだ子供っぽさを残した幼馴染みは、中身も見たままお子様なのだ。

「もう少し勉強する。気にしないでいいから先に寝てろ」

本当は、忠成の傍に寄るのが怖いだけだ。

でも、この幼い友人にそんな下心なんて分かりやしないだろう。

忠成に背を向けていることで、俺は躊躇^{ためら}いなく苦笑の表情を浮かべられた。

「秋連、頭いいのに本当頑張るよな。俺なんかまだ課題帳開いてもないのに」

そりゃあ、毎日部活に追われていれば無理もないだろう。その上寝るのがこんなに早いのだ。

（この調子じゃ、今年もきつと夏休みが残り数日になったころ泣き付いてくるな）

毎年恒例の行事を思い出して、俺の顔は自然ほころんだ。

小学生のころ、馬鹿正直に俺のやったものを正確に写した忠成は、ズルがバレて担任にこっぴどく叱られた。忠成が、夏休み帳を全問正解するなんて、誰の目にもおかしく見えたからだ。当然見せたのが俺だというのもすぐに分かって、とばっちりを食らったのを覚えている。

それからは、適当に間違いを含ませて写すことを覚えた忠成。その労力を、別の部分に使ったらもつと伸びるはずなだけだな。

そこまで考えて、しかし、忠成が自分で何もかもできるようになったなら、それはそれで寂しいような気もすると思いついてしまう。自分は忠成を守る男に成長したいと願う一方で、当の幼馴染みには変わって欲しくないと望む自分勝手な感情に気付いて、俺は軽い自己嫌悪に陥った。

「秋連……？」

^{あいつ}相槌すら打たない俺を不審に思ったのだろう。忠成が恐る恐る声をかけてきた。

「……あ、ああ……すまん。ちょい考え事してた」

今振り向くのはまずい。

背を向けたまま応じると、

「今年も多分お願いすることになると思っただけど……」
躊躇いがちに問う声がした。

「ああ。こっちもそのつもりだから安心しろ」

俺がそう返すと、背後から安堵したような吐息が聞こえてくる。

「ね、俺、本当に先に寝ちゃってもいいの？」

安心したら睡魔が襲ってきたんだろう。

その声が、眠気を多分に含んでいることを感じ取った俺は、それでも俺を気遣う忠成に思わず嬉しくなってしまう。

（やっぱりコイツは可愛い）

ヤバイ感情だと思いはするけれど、俺は今はっきりとそう、自覚した。

2（後書き）

友人と一緒に創作中心サイト「空と夜」運営中。

もしよかったらそちらもチェックしてみてください

<http://soyo.silk.to/s-y/>

上記サイト内、リレー形式でR18指定のBL小説連載中です

机に向かっている、勉強なんてはかどるはずがない。

後ろで忠成が眠っている気配がするからだ。

スースーという規則正しい寝息が、エアコンのモーター音より遙かに大きく聞こえてしまう。

これで気にするな、というほうが無理だ。

一応俺だって健全な男。気になる存在が、すぐ傍で無防備にしているのを知っていて平常心で居られるはずがない。

落ち着け落ち着け、と強く心に念じるけれど、そうしていること自体、気にしている証拠だ。

壁の時計を見ると、さつき見てから五分しか経っていない。

数分おきに時計を見上げては、一向に落ち着きを取り戻せない心臓に舌打ちをする。

そんなことを、忠成が眠ってから何十回続けただろう。

「十一時過ぎか」

忠成が「おやすみ」を告げてから、優に二時間以上が経過していた。

そろそろいいだろう。

忠成が眠りについてすぐ、部屋の電気自体は落としてある。それで、机に付随している小さな蛍光灯の明かりだけが部屋内を照らす全てだった。

頼りない明るさの中、恐る恐る後ろを振り返ると、俺の影が重なるところに、薄っすらと忠成のシルエットが見えた。

やっぱり今日も枕を抱きしめているみたいだ。

音を立てないよう細心の注意を払いながらベッドサイドに歩み寄ると、俺は苦々しい気分でその寝姿を見下ろす。

「俺の前でぐらい素直になれよ」

まるで何かにすがりつくように枕を抱いて眠る忠成に、胸の奥が

ズズズキと痛んだ。

俺はこの幼馴染みが、一度寝入ってしまったえば少々のことでは起きないことを知っている。

ベッドの傍らに腰を下ろすと、無防備に眠る忠成の頭をそつと撫でる。髪の毛に触れるか触れないかという、ソフトなタッチだ。このくらいで起きるはずがない。

そう思っていて、こんなにも胸がドキドキするのは、別の部分で反応しているからに他ならない。

ライトを後ろに背負う格好になっているせいで、俺が覆い被さると忠成の寝顔は影に沈んで見えにくくなる。

それでも目が慣れてくると、薄っすらと開かれた唇の形状までもが鮮明に見えるようになるから不思議だ。

視覚に入るそれが余りにも蠱惑的で、俺は半ば吸い寄せられるように忠成の唇を指でなぞった。その柔らかい感触に、もつと触れたいと請う。

その衝動に、思わず腰を浮かせかけたのと同時に、忠成が寝返りを打った。その瞬間、俺は動けなくなる。

（俺は今、何をしようとした？）

明らかに忠成にキスしようとしていた自分に、俺は動揺を隠せない。

グツと拳を握り締めると、慌てて忠成から目を逸らした。

このまま彼を見つめていてはいけないような気がしたから。

でも、いつまでも逃げているわけにはいかない。

俺は、忠成を救いたいのだ。

明らかに無理している幼馴染みを、これ以上放置するわけにはいかない。

一呼吸置いてゆっくりと忠成のほうを振り返ると、視線の先に先程と変わらぬ様子で安らかな寝息をたてる忠成がいた。

幸い、さっきの寝返りで顔はあちらを向いている。

俺はゆっくり立ち上がると、ベッドに片膝をついて忠成の手から

枕を抜き取った。

しっかりと抱いているように見えたが、指で握り締めていたわけではなかったらしい。

思いのほか簡単に抜けた枕を、俺はベッド横の床に置いた。

その途端、眉間にしわを寄せてうなされる忠成。

無意識に両手を伸ばして枕を探す仕草をする。

俺は、黙ってそれを見つめていた。

いつもなら、眠っている忠成から枕を奪うような真似はしない。したとしても、今みたいになつたら迷わず自分の手を差し出していた。

忠成は、とりあえず何かを抱いていれば落ち着くことを知っていたから。

でも、今夜は何も差し伸べてやるつもりはない。

一生懸命何かを掴もうと宙を掻く忠成の両腕を見つめながら、俺は「冷淡になれ」と自分に言い聞かせた。

本当は、こんなに辛そうな忠成の顔を見るのは耐えられない。

今すぐにでもその手を取って、自分の腕の中にきつく抱きしめてしまいたい。

そうすれば、忠成がホッとした顔をして眠り続けることを知っているのだから。

「……んっ！」

しばらくそのままにしていたら、忠成が苦しそうに吐息をついてゆっくりとまぶたを上げた。

そうして自分の両腕に枕が握られていないことに気付くと、ハッとして起き上がった。

そこで、すぐ傍にいる俺に気付く。

「秋、連……？」

きょとんとして俺を見つめてから、「枕は？」と恐る恐る口を開く。

まさか俺がわざと取り上げただなんて思いもしないんだろう。

純粹に問いかけてくるその視線に、俺は視線を逸らしたいような衝動に駆られる。

でも、ここで逃げては駄目だ。

そう言い聞かせると、一呼吸置いて、

「俺が取った」

淡々とそう告げた。

その台詞に、忠成が瞳を見開いたのが分かる。

「……な、んで……そんな……こと？」

解せないという表情をする忠成に、俺はわざとあからさまに溜め息をついてみせた。

「秋連……？」

不安そうに揺れる瞳が、薄暗がりの中でもはつきりと見えて、俺は正直ひるみそうだった。

「お前が……素直にならないからだ」

「え？」

意を決して告げた俺の言葉に、忠成がきょとんとした顔をする。

どうしてそういう言葉が出るのか理解できないらしい。

「お前な、俺が気付いてないと思ってたのか？」

ここまでできたら言うしかない。

俺はいよいよ覚悟を決めた。

もしこれが原因で忠成が寄り付かなくなったとしても、それはそれで仕方ないことだ。

俺は、忠成に嫌われる以上に、彼が無理していると知っていて気付かない振りをし続けるほうが嫌だった。

忠成は勉強に関して言えばできるほうじゃない。でも、人の気持ちを察することにかけては長けている。そればかりか、周りの気持ちを考えすぎて自分が損をするタイプだとも思う。俺みたいに自己中心的な人間とは違い、他者を思い遣ることができる奴だ。

それが、一人っ子の俺と、妹きょうだいがいる彼との最大の違いなんじゃないだろうか。

そんな忠成が相手なのだ。

きつと、俺の気持ちだつて汲んでくれるはず。

これはある種の賭けだ。

忠成の性格を知っているからこそ、絶対に負ける気がしないズルイ賭け。

この期に及んで、そういうことを考えてしまふ辺り、自分は物凄く打算的で嫌らしい奴だな、と思った。

「……どう、いう……意味？」

薄らぼんやりとした明かりの中、忠成が不安そうに俺を見つめる。ベッドに座り込んだ忠成と、その傍に片膝を付いて、ほんの少し彼を見下ろす格好になっている俺。

また、だ。

上目遣いで見上げる忠成のその表情に、俺はそんな場合じゃないと分かっているがドキドキしてしまう。

場違いに騒ぐ心臓を落ち着けようとしたら、自然、手に力が入った。

立てた膝の上に載せた拳を力強く握り締める俺に、気付いているのか居ないのか。

忠成が、不安そうな顔をして俺を見つめている。

その視線にとうとう耐え切れなくなつて、俺は彼から目を逸らした。

「秋連？」

俺が忠成を追い詰めていたはずなのに、いつの間にか立場が逆転してないか？

そう思う焦りからか、背筋を冷たい汗が伝った。

忠成を押し倒してしまいたい、という衝動を押し殺すのは存外骨の折れる作業だった。

心を落ち着けるためにゆっくりと深呼吸をすると、俺は忠成の目をしっかりと見つめ返しながら言葉を紡ぐ。

「忠成。チュウが死んで……本当は寂しいんだろう？」

意を決して告げた言葉に、忠成が瞳を見開いた。

それから、不自然な態度で視線を逸らす。

「そ、んな、ことない……。俺、思ってた以上に平気……だったし」
しどろもどろにそう言つて

「現に……チュウが死んだとき、俺が泣かなかったの、お前だつて知つてる、だろ……？」

切り札のようにそう付け加えた。

「ああ。知ってるさ」

だから問題なんじゃないか。

こいつ、俺がそんなに鈍感な奴だと思っているんだろうか？

そう思つたら、無性に腹が立ってきた。

「知ってるから心配してるんじゃないか……！」

声を荒げるつもりはなかったのに……。

気がついたら、そう叫んで忠成をベッドに押し倒していた。

まずい……。

抑えられなくなりそうだ……。

激情の余り取ってしまった行動に、俺は一瞬戸惑った。しかし、俺に組み敷かれた忠成の虚ろな表情を見て、何とか情欲に流されるのを踏み留まることが出来た。

俺にさえ、嘘をつこうとする忠成に、信頼されてないような気がして、俺は本当に悲しかった。

それが、表情に出ていたのかも知れない。

ぼんやりとしていた忠成の瞳に、戸惑いの色が揺れた。

俺はそれを見逃さなかった。

「……あのな、忠成」

彼を押さえつける腕を少し緩めると、忠成を引き起こしながら言葉が続ける。

「悲しいときには悲しいって言っていていいんだぞ？ それはちっとも恥ずかしいことじゃない。少なくとも婆ちゃんが死んだときにはち

「やんと出来てたじゃねえか」

素直になれ、と囁んで含めるように言い聞かせる俺に、忠成が今にも泣き出しそうな顔になる。

「……でもっ！」

それでもまだ迷うところがあるのか、寸でのところで涙を引つ込めると、忠成は伏せていた視線を真っ直ぐ俺のほうへ向けて口を開いた。

「俺、兄貴だから……」

妹が出来た瞬間、自分は兄になってしまったのだと忠成は言う。そうなった以上、子供の頃のようにいつまでもメソメソしてみんなに心配をかけるわけにはいかないのだ、と。

祖母が亡くなったときみたいにどん底まで落ち込んで、両親の手を患わせるような真似は出来ないのだと言って口ごもる忠成に、俺は言葉を失った。

子供だ、子供だと思っていた忠成の、意外な苦悩に虚を突かれて呆然としたのだ。

忠成は忠成なりに考えて頑張っていた。

例えばそれが傍目には無謀な虚勢であつたとしても――。

忠成の気持ちも分からないではない。

俺にだって、無理は承知で頑張りたいと思ってしまうときがあるし。

でも、忠成ほど真っ直ぐじゃない分、適度に力を抜くことも知っている俺は、どうすれば自分の中に溜めずに済むかも計算付くのだ。

不器用なぐらいに裏表のない忠成の頑張りは、逃げ場が無いだけに見えて痛々しい。

「……お前の言いたいことはよく分かった。けど、家族の前では無理なくちゃいけないとしても、せめて俺の前でぐらひは素直になつてくれないか？」

自分で逃げ道を作ることが出来ないのなら、俺が作ってやればいい

い。

「……っ！」

その言葉に、ビックリしたように瞳を見開く忠成を、俺は恐る恐る抱き寄せた。

どうか心臓のざわめきを見破られませんように。

そう願いながら。

嫌がって俺を突っぱねるかと思っていた忠成が、予想に反しておとなしくしていることに、俺の心臓はますます喧やかましくなる。

でも、そんな俺の懸念は、意味のないものだとすぐに分かった。

俺の腕の中で、忠成が盛大に泣き始めたから。

今までずっと我慢していた感情を一気に放出したようなその号泣に、柄にもなく俺までもらい泣きしてしまった。

「……有難う」

だから、ややあつて忠成がぼつんと呟いたそのセリフが、俺にはハッキリと聞こえなかったのだ。

「……え？」

それで、間の抜けた声を出してしまった俺に、泣きはらした目をした忠成が、顔を上げてもう一度礼を言う。

目は腫れてしまっているけれど、今回の上目遣いは、いつものなんて比にならないくらい凶悪に可愛い。

でも場面が場面だけに、俺は理性を総動員して邪な気持ちを封じ込めた。

「あ、その……えっと……どういたしまして……？」

それで、俺にしては歯切れの悪いしどろもどろな返しになってしまったのだ。そんな俺を見て、忠成がプツと吹き出した。

「秋連、らしくないぞ？ 涙まで出ちゃってるし」

そう言いながら。

その笑顔に、俺は恥ずかしさや腹立たしさを感じるより、嬉しくなってしまった。

忠成が、取り繕った笑顔ではなく本心から笑ってくれた。それだけのことが、どうしてこんなにも嬉しいんだろう。

「明日から枕持って来るの、やめるよ」

しばしの沈黙の後、決意したようにポツリとそう呟いた忠成が、その代わり、色々話聞いてくれるか？」

そう言って、ちよつと照れたようにうつむいた。

「ああ。俺でよければいつでも」

幼い頃からそうやって二人で成長してきたのだから。

ニツと笑い返した俺に、忠成がまた微笑んだ。

明日から、チュウの代わりは俺がする。

枕なんかに、その役目を取られてたまるか。

そんな風に思ったのは、顔に出さないよう頑張った――。

【了】

3（後書き）

友人と一緒に創作中心サイト「空と夜」運営中。

もしよかったらそちらもチェックしてみてください

<http://soyo.silk.to/s-y/>

上記サイト内、リレー形式でR18指定のBL小説連載中です

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7960c/>

子供の虚勢

2010年10月8日15時22分発行